

ニ滴セズ

二、給餌

一日三回朝、晝、夕各日量ノ三分ノ一宛

但シ晝間鳩ハ冬季ニ一回、又夜間鳩ハ夕ノ代リニ初夜ニ給ス

給餌ハ衛生上ノ見地ヨリ舍外飛翔呼ハトニ關係ナク努メラレ一定時ニ行フモノトス

第三節 蕃殖

常ニ活動的氣概ト強靱ナル體力トヲ保持セシムル為蕃殖ヲ次ノ如ク制限ス

一、夜間鳩 一年ヲ通ジ初春ニ一回トシ概ネ一番仔ノ巢立ヲ俟テ鳩巢ヲ撤去ス

二、晝間鳩 春季ニ一回以内トシ概ネ二番仔ノ巢立ヲ以テ鳩巢ヲ撤去ス

海 軍

昭和八年七月 大倉納

第四節 使用鳩

イ、體力復健ナルモノ

只、成、幼鳩ヲ問フ凡テ基礎訓練完了ノモノ

ハ、年齡ハ當歲ヨリ五歲迄（夜間鳩ハ三歲迄）トス

第五節 訓練

鳩ハ頗ル習慣性ニ富ム鳥類ナリ故ニ常時一定ノ調教訓練ヲ課スル時ニ不知不識ノ間ニ其ノ活動性ヲ偏狹ニ陷ラシムル虞アリ
譬ヘバ午前ノミナ放鳩ヲ課セル鳩舎ハ午後殊ニ夕刻放鳩ノ際歸巢成績劣等ノ鳩ヲ養成シ又好天氣ニミテ選ミテ訓練ヲ課セラレタル鳩ハ不良ノ天候ニ使役シ得ザルガ如キハ其ノ一例ニシテ現在多クノ鳩舎ニ於テ之等ノ弊ヲ見受クルハ遺憾ナリ
通信鳩舎管理者ハ深ク此點ニ留意シ何時如何ナル状況ニ於テ使用セラルモ完全ニ其ノ任務ヲ達成シ得ル鳩ヲ養成ニ

海軍

昭和八年七月 大倉納

努メザルベカラズ、フレガ為日常ノ調教、訓練ハ實際ノ情况ニ適
應スル如ク實施スルヲ要ス

尚訓練實施ニ當リ特ニ注意スベキハ鳩ハ生來臆病ナルヲ以テ
努メテ急激な變化ヲ避ケ必ズ漸進的ニ諸種ノ調教、訓練ニ
移ルヲ要ス

一、舎外飛翔

次ノ要領ニ依リ實施スベシ

イ、早朝

日出前後大氣ノ最清浄ナル時機ヲ利用シ全鳩ヲ出シ約三
十分間施行

ロ、日中

午前午後通宜ノ時刻(毎日同一時刻ナラザルヲ要ス)ニ於テ時
間以上二時間以内連續飛翔セシム

海軍

昭和八年七月 大倉納

ハ夕刻

日没前後より三十分乃至一時間飛翔セシム

ニ注意事項

一、舎外飛翔、際々全鳩堅キリ集團（必ズシモ一個、集團ナルヲ要セズ）ヲ作り呼シ、令アル迄鳩舎上空ニ於テ整然飛翔セシムルヲ要ス。フレガ爲係員一人ハ絶エズ鳩ニ注目シ群ヲ離レテ下降シ樹木、屋上等ニ降着スル等不規律ニ流レザル様極力矯正スルヲ要ス

二、鳩室内、掃除ヲ主目的トシテ舎外飛翔ヲ行ヒ掃除ニ熱中レ飛翔中ノ鳩ヲ顧ミザルガ如キハ慎マザルベカラズ

（入舎不良ノ素因トナル）

三、舎外飛翔、際々何時レカ鳩舎上空より姿ヲ消シ附近ノ海岸ニ降着シ海草等ヲ食リ數十分後ニ歸來スルヲト

アリ之ヲ等閑ニ附スル時ハ何等舍外飛翔ノ効果ナキニミナス一
 習慣性トナリ延テ放鷹ノ際途_中着陸ノ惡癖ヲ生ジ之ガ
 矯正ニシナカラズ苦心ヲ當目ムルニ至ルベシ故ニ斯カル場合ハ時ヲ移
 サズ着陸場所ヲ突止メ豫メ待テ受ケテ再ビ來ラサル様強
 ク追拂フト共ニ鷹舎ニアリテハ土壇ノ給與ヲ怠ラサルヲ要ス
 既ニ習慣性トナレルモノハ大ヲ放ツテ追立ツルカ又ハ小銃空包ヲ放
 ツテ飛立タルムモ亦一法ナリ

四柳、軍鷹ハ鷹舎内ニアルカ又ハ飛翔中ナルカ或ハ籠内ニアルカ其
 ノ居所以上ニツニ限ラレモノニシテソレ以外ノ場所ニ鷹ノ姿ヲ認ムルハ
 係員ノ未熟不熱心ノ表現ト知ルベシ

以上ハ主トシテ晝間舍外飛翔ニ於ケル實施要領ヲ示シタルモ
 ノニシテ夜間ニ於ケル舍外飛翔ハ別ニ夜間鷹養成法ニ準據
 シテ實施スベキモノトス

二、呼込調教

入舎、巧拙、通信成績、影響ある所甚大なり故に歸着せしむ。
 對最短期時に入舎せしむる爲に、得舎構造様式ノ改善ト
 相俟テ入舎技術ノ向上ヲ期セザルベカラズ

得舎構造様式、既述ベシ、以下入舎調教上特ニ所要
 ノ事項ヲ擧ゲル

イ、笛音ノ愛撫ノ聲ニシテ又不可侵ノ號令ナル信念ヲ抱カシメヨ
 入舎調教上唯一ノ手段トシテ一般使得者間ニ利用セラル、笛
 音(呼笛又ハ口笛)ト給餌トノ關係ヲ餌ノ漸減ニヨリ次第
 ニ疎隔シ遂ニ給餌ヲ廢シ得ヲシテ笛音ハ給餌ノ呼聲ニ
 アズシテ使得者ノ愛撫ノ聲トシテ感ゼシムルト共ニ又不可侵ノ
 號令ナル信念ヲ想起セシム(口笛ヨリ愛犬が直ガチニ走り
 寄ル如ク)次第服従心ヲ涵養ス

口呼ハ、妙機ヲ捉ヘテ笛音ヲ發ヒリ

入舎調教ノ初期ニテリハ、舎外飛翔中、鳩ノ大部が稍、二波

勞ヲ感ジテ鳩舎ニ降着セントスル時機ヲ窺ヒ其、妙機

ニ合致スル如ク呼ハ、號令(呼笛長音一聲)ヲ發シテ(齊

ニ到着臺上ニ降着セシメ次デ入舎號令(呼笛又ハ口笛

短音連発)ヲ發シテ急心凍入舎セシム

號令ニ背反シテ飛翔ヲ繼續スル鳩ニ對シテハ更ニ此ノ手段

ヲ繰返ス

到着臺上ニアリテ入舎ヲ躊躇スル鳩ニ對シテハ外方ヨリ之ヲ

追ヒハム如クシテ凍カニ入舎セシム

斯ノ如クシテ回々重ヌル時ハ不知不識ノ間ニ呼ハ(入舎)

號令ヲ彼等ノ腦裡ニ刻ミ付クルヲ至ルヲ以テ爾後漸次

呼ハ、時機ヲ凍シ遂ニ何時発令スルモ直ニ之ニ從ヒテ降

海軍

昭和八年七月 大倉納

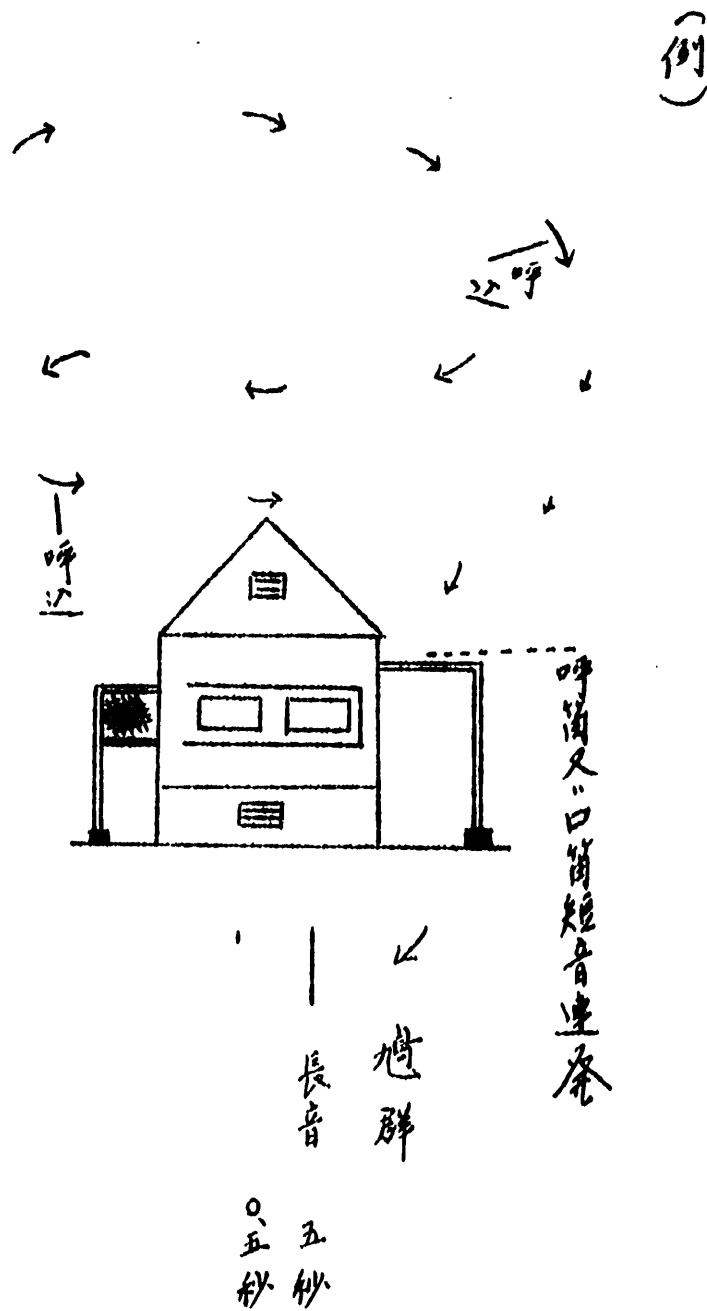
着入舎セシムル至ルモトス

ハ入舎ト給餌ハ別物ナリ

既述ベタル如ク最良ク調教セラレタル鷹ノ入舎ニ一粒ノ飼糧ヲモ要求スルモアラズ故ニ入舎ノ際規程ノ給餌時刻トナリタル時ハ給餌ヲ行フモ然ラサル場合ハ給餌ヲ行フトナシ

ニ注意事項

一 呼込號令トシテ發スル笛音ハ鷹ノ高度、旋廻等ヲ考慮シ最有効ナル時機ヲ捉フルヲ要ス



0756

海軍

昭和八年七月 大倉納

（一）入舎調教ノ初期ニヤリテハ、トラップ内外ニ極メテ少量ノ飼糧ヲ散布スルコトアルモ、調教進展スルニ從ヒ萬已ク得ガル場合ノ外決シテ之ヲ行ハザルモノトス

（二）號令トシテ発スル呼笛（長音）ハ甚ダシク回数ヲ重ネザルコトニ留意スベシ

以上述ベタル方法ニヨリ最良ク調教セラレタル鳩舎ニ於テハ、舎外飛翔開始後十分、高度約五十米、飛翔半径約七十米ヲ鳩舎上空旋廻飛翔中、全鳩（數十羽）ヲ呼ビ發令後四十秒内外ニテ悉ク入舎セシメ得ルモノナリ

（昭和七年以來横濱ニ於ケル實驗）

三、放鳩訓練

1. 午後放鳩ヲ勵行セヨ

鳩通信ノ統計ニ依ル特別所距離ニ於ケル通信ヲ除キ

海軍

昭和八年七月 大倉納

午後、歸巢成績ハ概シテ午前ノソレニ劣ル故ニ此弊ヲ脱スル
 爲放鳩訓練ハ努メテ午後ニ多ク實施スルヲ要ス
 只屢々時刻放鳩ノ實施セヨ

鳩ハ生來臆病ニシテ時刻ニ白ルニ從ヒ自己ノ保安上極度ニ宿
 泊所ヲ求ム習性アルヲ以テ晝夜間鳩ヲ午後迄ク放鳩シタ
 場合時間ニ於テ歸巢ニ充分ノ餘裕ヲ有スル拘ラズ稍
 モスレバ出發ヲ躊躇シ海上放鳩ニ於テ殊ニ然リ又出發ス
 ルモ途中ニ宿泊シテ翌朝歸巢スル例少ナカラズ

然シテ、傾向ハ通信距離ヲ増スル或ハ放鳩時刻ノ早
 ルニ從ヒ一層顯著ナリ、弊ヲ除クタメニ屢々時刻
 放鳩ヲ實施シ鳩ニ對シ保安上充分ノ自信ヲ保タシムル
 ヲ要ス

時刻放鳩ハ初期ニ於テハ極メテ近距離ニ於テ實施シ全鳩

易々トシテ歸巢セシメ次第ニ距離ヲ増加スル如ク實施スルヲ要ス
ハ海上放鳩ヲ實施セリ

鳩ハ生來水ヲ惧ルモノナリ故ニ屢々海上放鳩ヲ實施シ之ヲ慣
レシムルヲ要ス

四、荒天訓練

強力鳩養成上極メテ重要ノ訓練ニシテ特ニ降雨雪(豪雨
ヲ除ク)霧中(濃霧ヲ除ク)強風等ヲ利用シ主トシテ晝間
實施スルモノナルモ一與テ之ヲ強フルトハ危險ナルヲ以テ先ヅ荒
天時ニ於ケル展望訓練(十分乃至三十分間軍鳩ヲ展望臺上
ニ曝ス)ヲ課シ鳩ノ漸ク之ニ慣ルルニ及ビ今外飛翔ニ移リ畧
之ヲ完成シタルトキ進ンデ放鳩訓練ヲ課スルモノニシテ常ニ
易ヨリ難ニ漸ク進ムヲテ實施スルト共ニ荒天ニ對スル鳩ノ對抗力
ニ關シ深甚ノ注意ヲ要ス

海軍

昭和八年七月 大倉納

如斯シテ訓練ヲ繼續スルハ六月以上ニ亘ルトキハ次第ニ荒
天ニ對スル活動意識ヲ奮起シ對抗力ヲ増進シ所期ノ目的
ヲ達成シ得ルモノナリ

實驗ノ結果ニ依リテ荒天訓練ヲ經タル軍艦ハ次ノ場合ニモ能ク
歸巢シ通信ノ目的ヲ達成ス

イ、小雨、霧中（濃霧ニ至ル）距離ヲ特別熟地ノ外歸巢
困難ニ至モ熟地ニ至ル能ク百軒以内ノ通信ニ通ス

右ノ場合夜間ニ至ル能ク三十軒以内ニ至リ歸巢ス

只降雨斷續視界相當良好ノ場合百五十軒以内ノ通信ニ何
等懸念ナク使用シ得

前二項ノ場合海上放電ニ依リテ島嶼、陸影、燈光（光芒）
等ヲ全ク発見シ得ル情勢ニ依リテ歸巢困難ナリ

ハ、風速二十米突以内ノ海風ニ對抗シテ歸巢スル能力ヲ有ス

五、障礙物時一行訓練

夜間又ハ晝間天候不良、爲視界ヲ閉サレタル時等飛翔中ノ機ノ架空線其、他ニ衝突シ附近ヨリ其ノ慘死體ヲ發見シ係員ノ袖ヲ濡ラフト屢々アリ

本訓練ハシテ慘害ヲ可及的防止スル目的ヲ以テ課スルモノニシテ初期ニ於テハ先ヅ晝間僅々數條ノ架空線下又ハ複雑ナル樹板下ノ放機ヲ行ヒ漸次複雑ナル障礙物下ノ放機ヲ實施シ遂ニ之ヲ時刻、夜間（夜間機）及ボスモノシテコレハ必ズ易ヨリ難ニ漸進的ニ實施スルヲ要ス

六、應用訓練

不通信機帶

通信機行慣熟シタル爲屢々多數ノ機ニ通信用紙（器具）結着飛翔（機行）セラルヲ要ス

海軍

昭和八年七月 大倉納

又長時間ノ携行ニ耐ヘシムル爲鳩室内ニ於テモ時々之ヲ實
施スルヲ要ス

當テ横防ニ於テ館山灣口(約四十軒)ニ出動中ノ船艇ヨリ
俄ニ印刷物發送ノ必要ヲ生シタルヲ以テ相當無理トハ知リ
ツ、美濃紙全葉ヲ其ノ儘鳩ノ脚ニ結着シテ日没約一時
間半前ニ放鳩セルニ遂ニ歸着セズ(行方不明トナ)之ト同
時ニ他ノ一羽ノ鳩ニ美濃紙半葉ヲ結着放鳩セルニ約一時
間後第二海堡(横防ヨリ約十軒、放鳩地ヨリ三十一軒)ニ
降着シ同所鳩舎ニ入舎セル例アリ

之等ニ鳩が美濃紙一枚ノ運搬能力ヲ缺クモノニアラスシテ
平常全ク如斯訓練ヲ課セザリシニ因ルモノナリ

只短時間舍外飛翔及以テ距離放鳩訓練

極多所距離ヨリノ通信ニ備フル爲屢々五分一十分一

海軍

昭和八年七月 大倉納

ニイ分等ノ短時間舎外飛翔及數料ノ近距離設鳩ヲ實
施スルヲ要ス

右訓練ハ又一方ニ於テ鳩ノ服従心ヲ涵養シ軍鳩員ノ呼
込技術演練上ニモ肝要ノ事項ナリ

コノ訓練ヲ課セザル鳩ハ僅々數料ヨリ使用シタル場合飛翔
時間ノ不足ハ歸着鳩ヲシテ空シク鳩舎上空ニ旋廻飛翔
ヲ繼續セシメ容易ニ呼込ニ應セザルニ至ルベシ

ハ毎日一回各鳩ニ手ヲ觸レシ鳩ヲ握ルハ飛術ノ第一歩ナリ鳩
ハ生來臆病ニシテ且敏感ナリ故ニ放鳩ニ當リ粗暴ノ取
扱ヲ支トヤハ直チニ感情ヲ損ジ歸巢成績ニ影響ヲ及ス故ニ
之が取扱ノ間シテハ親切ヲ旨トシ努メテ制規ノ保持法ニ依
ルベキト勿論ナルモ實際通信ニ當リテハ必ズコレヲ斯ノ如
實、施セラザル場合アルトモモチ考慮セザルベカラス

斯ル場合ニ備フル為係員ニ日常努メテ體體ニ手ヲ觸
レ少キナリモ一日一回ニ各體ヲ保持スル氣分ヲ調教スルヲ要ス
斯ノ如ク調教スルトキハ體ニ層人體ニ觸ルハストニ慣ルハ
以テ假令制規ノ保持法ニ依ラズシテ放恣セラレタル場合ト雖
モ體ノ感情ヲ損スルトナリ從テ歸來成績ニ大ナル影響
ヲ及ボサシムルベシ

第五節 衛生

健康ハ強力體養成上第一ノ條件ナリ故ニ般衛生法ヲ
重ンズルトハ勿論特ニ次ノ事項ニ留意スベシ

一、日光浴ヲ勵行シ直特ニ支障ナキ限リ努メテ外氣ニ觸レシメヨ
二、給餌ノ時刻ヲ一定シ濫リニ間食ヲ與フ勿レ
三、飲水ハ時々取換ヘヨ
四、上埴ヲ絶ヤス勿レ、又給餌ノ給與ヲ怠ル勿レ

海軍

昭和八年七月 大倉純

ホ一度鳩眼ヲ注ガバ同時ニ必ズ彼等ノ健否ニ意ヲ留メヨ
ヘ病鳩ハ早期ニ發見シ隔離シテ治療セヨ

ト害獸ニ襲ハルハトナキ様各部ニ注グ息セヨ

大寒中ニテモ水浴ヲ勵行セヨ思ヒ遣リ過ヤテ及テ彼等ヲ
苦シムル勿レ

要之本ニ養成法ハ鳩通信上並保安上ノ見地ヲ常ニ實際ノ
情況ニ適應スル如ク訓練調教ヲ實施シ最大ノ効果ヲ收
ムル主眼トスルモノニシテ從事員ハ内ニ慈母ノ情ヲ藏シ外ニ慈
父ノ監督眼ヲ開キテ鳩ノ指導ニ當ルヲ要ス

第五章 艦(艇)上機舎の研究

第一節 經過概要

一、若宮機舎

大正十五年五月小型、假設艦上機舎・横空産幼機二十科ヲ編入シ軍艦若宮搭載ス最初ハ單ニ試験的ニ過ヤカリシニ飼育訓練ノ進歩スルニ從ヒ次第ニ乗員ノ信賴ヲ得翌年ニ出勤スル航空機ニ必ズ機ヲ携行スルニ至レリ

大正十二年十一月若宮其ノ所屬ヲ佐世保ニ変更セラルヤ横空十二號艇(百五十噸)ニ搭載中ノ軍艦及分解式艦上機舎ヲ同艦ニ移載シテ在來ノ假設機舎ニ換ヘ機モ合計七十羽ニ増殖シ引續キ研究ヲ繼續セリ

二、横空第十二號艇機舎

大正十一年八月十八日入分解式艦上機舎ヲ搭載シ幼機七

十羽ヲ編入ス其目的ハ艦上機舎ニ関スル基礎的研究ト小汽
機ニ於ケル機上通信ノ研究ニシテ艦上機ノ特質ニ関シ必要ナル
多大ノ暗示ヲ收獲シタリ

大正十一年十二月軍艦若宮ニ移載ス

三、春日機舎

大正十二年四月軍艦春日浦塩方面ニ出動セントスルニ當リ
當時、艦長百武大佐ノ希望ニシテ約二十羽ヲ分置シ同時ニ
軍艦員二名ヲ乗艦セシメタリ其ノ後約一ケ年間相當通信
ニ資スル所アリ又實驗トシテ貴重ナル收獲ヲ得タリ大正十三
年四月任務終了ト共ニ再び横空ニ復歸セリ

四、高崎機舎、金剛機舎、近藤機舎、能登機舎

大正十一年特務艦高崎大演習航空母艦トシテ行動スル機
トシ同艦ノ分解式艦上機舎一ヲ成機、幼機各四十羽合計

ハイ科ト共ニ搭載セリ

其目的ハ艦上機術ノ基礎的研究ニシテ喜多山大尉(外下士官一兵二)之ガ研究當レリ不幸行動中ニシテ関東大震災ニ遭遇シ充分ノ所期ノ目的ヲ達ス能ハザリト雖モ海上機術ニ関シ得ル所多ク同年十月喜多山大尉退艦スル軍艦及軍艦員共ニ存置シ尚研究ヲ續行セタシメタリ

大正十三年一月第二艦隊司令部ニテハ軍艦ノ試用ヲ希望シ横空研究部ニ於テモ艦隊旗艦ニ於テ軍艦利用法ニ関シ研究ノ必要ヲ認メ居リシ場合ナリシヲ以テ特務艦高崎ノ搭載中ノ艦舎ヲ係員ト共ニ軍艦金剛ニ移轉シ斯項ノ研究ニ着手セリ爾後一ヶ月間石川大尉指揮ノ下ニ研究ヲ持續シ大演習ニ参加シ艦隊ニ於テ使用ニ付充分得ルベキアリキ

海軍

昭和八年七月 大倉結

海軍

昭和八年七月 大倉納

大正十四年、及び金剛、長門、横須賀、破泊ス事ナリシヲ以テ
此際潜水母艦ニ於ケル軍艦通信ニツキ研究スルコトトシ同艦
搭載ノ艦舎ヲ潜水母艦ニ移載シ研究ヲ繼續セリ
大正十四年十二月若宮陳備艦トナリ能登呂之一代リテ特設
航空母艦トナルヤ前者艦舎ヲ軍艦五十五羽ト共ニ後者ニ
移シ研究ヲ繼續セリ

大正十五年一月末迄、鯨艦舎ヲ廢止セラルヲ以テ翌二月同艦
舎ヲ軍艦六十一羽ト共ニ横空ニ收容セリ

昭和二年末ヲ以テ能登呂ハ特設航空母艦トシテノ役務ヲ解
カル、豫定ニテ同年十月同艦艦舎ヲ軍艦三十一羽ト共ニ横空
ニ收容セリ

艦艇ニ於ケル軍艦通信ノ價值ハ充分認めラルモ其ノ飼育訓
練ノ複雑繁鎖ナルト經費ノ關係上艦上艦ノ研究ハ能登

巨艦會最後トシテ中止セシタリ

五、横防艇上艦會

昭和六年四月横須賀防備隊(軍艦基礎機關)ニ於テ防備隊より近距離防禦海面ニ行動スル船艇ハ、軍艦通信可能ノ程度研究、為同隊第四^五身船(六十噸)ニ二十羽入、小型假設艦會ヲ搭載シ同年七月・至滿三ヶ月間實驗セルニ使艦術上貴重ナル資料ヲ得タリ

第二節 各艦(艇)上艦會ノ研究實施事項並其成績
本事項迄ヲ全部ニ自リ記載スルニ其タ複雑多岐ニ具ルヲ以テ一部ヲ省略シ若宮、金剛及最^近實施セル横防第五身船搭載ノ各艦會ニテ實施セル主要事項ノ記録ヲ摘記シ所見ヲ加ヘ以テ將來ノ資料ニ備フ

一、若宮艦會(第一回)

自大正十年五月
至大正十二年七月

佐伯	八幡	佐世保	佐世保	張順	大連	仁川	佐世保	三國尻	佐世保	佐世保
		木一三〇	四一六	四一五	四一三	三二〇	三二五	二一九	二一六	二一六
		四一五	四一九	四一七			三二四	三一九	二一四	一一五
		一〇	三	一			一〇	一	二ヶ月	一ヶ月
		り	地上	機上			り	り	機上	陸上
		二〇	八	二二			二九	八	一一	三二
		〇一三	〇一七	〇一九			〇一三	〇一七	〇一九	〇一九
		18/18	17/17	8/8			8/8	4/4	24/24	15/15
		此所各屋上より機上より 近距離ノ放機訓練ヲ 行フ								

海軍

昭和八年七月 大倉納

海軍

昭和八年七月 大倉納

二 航海中ノ設備

航海地帯	設備日	船舎(船)	距離(新)	乗務員(分)	運送(数)	記
自佐世川	十二年 三月二八	八	一〇	〇・一九	2/7	四軒以内ノ設備ニ以 前ノ数同施行
寺島水道	大正三〇	九	一六	〇・一九	6/6	總テ機上設備
自佐世川	七・四	九	二二	〇・一九	4/4	
佐世川港外	八一・二	九	一九	〇・一七	4/5	
佐伯湾	九一・二	九	三〇	〇・一七	4/4	

(以下略)

二 金剛艦 舍 (自大正十三年一月
至同十四年一月)

不編制

一 艦 舍 分解式艦上艦舎一 (大×八×六... 築房三二)

二 軍 艦 成四三、幼四六計八九外ニ離艦約一。

三 従事員 石川大尉(主任)外ニ下士官一、兵二

海軍

昭和八年七月 大倉純

註、倉特務艦高崎搭載中、モウ艦ト共ニ移轉シ三番砲
塔後方ニ整置ス

只馴致

前搭載艦ニ比シ宜騷タルヲ第一日恐怖ノ狀アリ

第三日目ヨリ稍、落着キ六日目ニ馴致完了セリ

十七日目ニ八裡砲射撃中倉外飛翔ヲ行ヒタルニ驚愕シテ
約五百米ノ高度ニ昇レリ

ハ出倉

充分ニ展望訓練ヲ課シタル後數羽ノ艦ヲ出シテ情勢ヲ窺ヒ
之ヲ數回繰返シタル後全艦ヲ出ス如ク實施セリ

ニ倉外飛翔

入港碇泊ノ際ニ必ズ出倉ニ次グ倉外飛翔ヲ實施スルヲ例ト
セリ

六月後、入港前原速航行中強制シテ飛翔セシメタルニ投錨 後、使用効果良好ナリヤ 搭載後約一月頃、午前四十分乃至一時間半午後三十分乃 至三十分迄行ヒシモ艦上僅ハ短時間宛屢々行フヲ得策ト思 考シ約半々年後より毎日二十分乃至三十分宛四回乃至五 回、舍外飛翔訓練ヲ課セリ 水碓泊中、放錨					
二周尾	宮島	江田内	呉	神戸	水碓泊
二二 八	二二 三	二一 〇	二一 七	二一 七	二一 七
入港當日	入港翌日	入港翌日	入港翌日	入港翌日	入港翌日
リ	リ	リ	リ	陸上	放錨所
一〇	六	五	一〇	八	距離
〇・一 三〇	〇・一 五	〇・一 五	〇・一 八	〇・一 五	（時一分）
8/8	10/10	20/20	8/8	1/6	飛翔回数
舍外飛翔後放錨					記
					事

海軍

昭和八年七月 大倉納

海軍									
吳	元山	大阪	有明湾	徳山	紀伊大島	航海中ノ放鷹			
平一〇	三二五	四二二	六二七	七二八	八二四	航海地点	放鷹日	自官島	自佐世保
〃	〃	入港二日後	入港當日	入港翌日	入港當日	連日(節)	連日(節)	〃	〃
〃	〃	(京都)	海上	海上	陸上	距離	距離	〃	〃
八	八	六〇	一〇	二〇	一四	(時一分)	(時一分)	〇・五	〇・一
〇・一〇	〇・一三	〇・一八	〇・二三	〇・二八	〇・三三	遅延数	遅延数	五/八	八/八
〃	〃	前日放鷹より 火中ノ放鷹ニシテ 火中ノ放鷹ニシテ	〃	〃	〃	記	記	同航中、後續航	〃

昭和八年七月 大倉組

南方洋上	大演習					自横須賀 至佐伯	佐伯沖	五島沖	自南有馬 至鹿島	自大隈 至一見	
一七	一六	一五	一〇一四	一〇一二	九一五	八一四	七二三	六一六	六一二	四一六	
					二〇						
一〇	不明	五〇	一〇	五〇	一七	一一	四〇	一一	七〇	一九〇	一五
一一一〇	〇一五五	〇一〇	一三〇	〇一五五	〇一五五	一一〇	〇一五	〇一四〇	〇一八	〇一四二	二一五
5/6	0/2	2/3	2/3	2/3	1/2	0/5	5/7	3/3	6/8	10/12	1/8
	一羽、仔勢二羽、秋月 三着船	天龍二十三羽搭載			天龍ヨリ	失跡中四羽、各羽二條 船二隻	及跡中、潜水艇ヨリ	比敵タリ	失跡中、四羽、仔勢入 港使歸合	全	分離行動中、係船ヨリ

海軍

昭和八年七月 大倉納

百一七	〃	一五	〇一四〇	5/7	北二十六羽搭載
〃	〃	一〇	/	〇/3	
〃	〃	一〇	一一三〇	3/6	圖翔西羽搭載
〃	〃	二〇	不明	2/6	

三、横防艇上艦舎 (自昭和六年四月至昭和八年七月)

不編制

一、艦舎 箱式小型艇上艦舎一 (三×一五×一三) 兩側展望裝置

二、軍艦 幼艦 二十羽

三、従事員 兵 一

目的

一、防備隊より近距離防禦海面(直距離約四十秒以内)行動

二、船艇へ、軍艦通信可能、程度決定

三、右に對し諸設備並通信法、研究

海軍

三、艇上艦ヲ他艇ニ移シタル場合通信ノ能否

四、上陸作戰ニ使用ノ目的ヲ以テ艦舎ヲ海岸ニ揚陸シタル場合通信ノ能否

ハ、設備

一、兩側展望網ノ周囲ニ帆布ヲ張り目隠トナス

二、屋上展望網ノ外周ニ取外シ自由ニシテ通風良キ鏝戸式ノ目隠板ヲ備フ

ニ、訓練計畫

一、第五曳船後部ニ艦舎ヲ搭載シ碇泊ノ儘艦舎ニ目隠ヲ施シ艦内訓練ヲ行フ

二、出動シ目隠ヲ外ニ訓練ヲ行フ

三、出動シ艦外飛翔ヲ行フ

四、出動中距離離散艦訓練ヲ行ヒ漸次延伸シテ隊ヲ

海軍

昭和八年七月 大倉納

放機訓練ヲ行フ

（五）一艇ヲ訓練シテ軍艦ヲ艦舎ト共ニ他艇ニ移載シテ訓練
ヲ行フ

（六）更ニ艦舎海岸ヲ揚陸シテ訓練ヲ行フ

（七）以上各項訓練日數ニ進捗ノ程度ニヨリ適宜之ヲ定ム

（八）曳船ノ出動ハ概テ毎週二回ヲ標準トス

（九）歸港碇泊中ハ目隠ヲ施シ碇泊地ニ別ルヲ防グ

本實施經過概要並所見

一實施期間

開始昭和六年四月二日

計三月

終了同年七月三日

二實施經過概要左表ノ如シ

年月日	作業概要	艦舎帳	記	事
	成艦五幼艦六收容		軍艦名ヲ附シ管理	

六四三	道ニ別致ニ着手ス	横防	セシム
自、四	展望道ニ自隠ヲ施ス	(辨別)	飼糧ニ食料トシ朝夕給ス
至、九	別致	右同	倉内展望台間出入自由トス
〇	〇七三。出港根岸沖ニ移 動訓練ヲ行フ	出動時 外	出動中ニ自隠ヲ撤去シ周 圍ヲ展望セシム
一	一五四五歸港	右同	(以下同じ)
一	〇八〇。出港走水沖 主トシ航行中、展望訓練		走水碇泊中ニ自隠ヲス
一	〇八〇。出港根岸沖 一二〇〇。築固出合 二利出合、大跡二利出合	右同	失跡艦ニ横空飛入合ニ移殖 セルモノヲ同條倉ニ入合セル ヲ以テ翌日收容ス
一	一四三〇歸港	右同	
一	幼適五科増殖	右同	

海軍

昭和八年七月 大倉納

り	〇八〇〇出港走水沖		失跡艦五羽中二羽、横防艦倉
り	一〇三〇第三海堡附近三羽		入倉三羽、走水砲臺樹枝
	二回失倉五羽出し全部失跡		二樓、歸還セズ
	〇八一五出港		
	〇九三〇第三海堡附近三羽		
	四回出倉先五羽、出順次数ヲ		
	増し十七羽、五内二羽、直ニ		
り	安ッ消シ残艦十五羽、對シ	右同	十七羽出倉二羽失跡
	稍、強制飛翔ヲ課セシ成績		
	良好ニシテ悉ク入倉ス		
	出倉時間約十五分		
	一四〇〇歸港		
	〇九三〇出港一四〇〇走水砲臺着		

海軍

昭和八年七月 大倉納

五	陸上三百米より二羽放鳥一羽失跡	右同	
	一羽入舎		
	一二。未だ出港一二。歸港		
	〇八二五出港。九三。未だ着		
	約時間半展望教練の後		
	總捕子羽出舎約三分後		
八	呼込ム	右同	
	右ノ内十四羽入舎六羽失跡		
	三四。再び總捕出舎約五分後		
	呼込ム十三羽入舎一羽失跡		
	一〇〇〇出港		
	一二。操斷附近より五分間微		
二	邊方舎外飛翔一羽失跡	右同	

海軍

昭和八年七月 大倉納

〇八四五出港	第三海堡附近 三十五分間漂	右同	航行中、舍外飛翔 土羽中一羽失跡
〇一五	泊中、舍外飛翔土羽全部入倉 次、微速及半速、舍外飛翔 五分間 失跡一	右同	陸行出動中、船、第四回放鳶
〇七三〇出港	一三五〇米水沖漂泊中五百米 〇一〇 羽放鳶全部入倉 一五四五取港	右同	陸行出動中、船、第四回放鳶
〇九三〇第三海堡、西方三漂泊 約三回海堡より放鳶全部入倉 次、約四時より放鳶二羽失跡 〇七四五出港航行中、舍外飛翔	〇七四五出港航行中、舍外飛翔	右同	第二回放鳶 全部入倉 第三回放鳶 二羽失跡

海軍

昭和八年七月 大倉納

海軍

昭和八年七月 大倉納

十羽全部入舎	次ニ就中ノ舎外飛翔	大羽失跡	〇七〇〇出港 一五〇〇出港	〇七〇〇出港 一四二〇出港	一三〇〇出港	第三海堡西方約三軒ニ至海 堡より放鷹八羽全部入舎	灰水沖ニ軒ニ於テ走水あり 放鷹八羽全部入舎	〇七四〇出港約五分後就中 二六ノ舎外飛翔ヲ全部失跡	二三〇出港	右同	右同	失跡鷹中ノ羽ニ破泊後收容
第九回放鷹(三軒) 〇八	第九回放鷹(三軒) 〇八	第九回放鷹(三軒) 〇八	第九回放鷹(三軒) 〇八	第九回放鷹(三軒) 〇八	第九回放鷹(三軒) 〇八	第九回放鷹(三軒) 〇八	第九回放鷹(三軒) 〇八	第九回放鷹(三軒) 〇八	第九回放鷹(三軒) 〇八	第九回放鷹(三軒) 〇八	第九回放鷹(三軒) 〇八	第九回放鷹(三軒) 〇八

海軍

昭和八年七月 大倉納

海軍

昭和八年七月 大倉納

九、右矢跡延焼数 六、 航行中、舍外飛翔、此レ 矢跡、中、小、大、此レ、舍外 飛翔、此レ、矢跡、清、此レ、 以テ、實、此レ、此レ、	ホ、所見	一、訓練期間中、船舎艇ハ毎週二回以上出動シテ訓練セバ成 功スモ、週一回以下而モ即日歸リ、出動訓練ニテ成功、見、東、 二、今、回、三ヶ月間、總出動回数、二十三回、内、軍艦訓練、機、會、 アリ、レ、モ、十七回、ニテ、二ヶ月間、略、二週二回、出動シ、約五軒、距 離ヨリ、放、槍、訓練、成功セシモ、爾後、都合、依リ、出動 回数、漸次、減少ス、從、ヒ、軍艦ハ海上、移動性、ヲ、失、ヒ、船 舎艇、定、繫、所、ニ、執、着、ヲ、生、ジ、沖、ニ、於、テ、放、槍、訓練、際、船 舎艇、距離、遠、キ、時、ハ、航行中、艇、ニ、歸、テ、逸、早、ク、定、繫 所、ニ、歸、還、シ、船、舎艇、歸、着、ヲ、俟、テ、歸、舍、ス、船、ヲ、生、ズ、ル、ニ 至、レ、リ
--	-------------	---

海 軍

昭和八年七月 大倉納

海軍

昭和八年七月 大倉納

三月隱ミ充分効力アルモノヲ陸上ニ設備シ艦舎艇入港セバ
直ニ艦舎ヲ其ノ中ニ移搬シ出動直前ニ艦舎艇ニ搭
載スル如ク實施スルニ大ニ定繫所ニ對スル執着ヲ得ベシ
四充分訓練スル機會アルニ陸上ヲ放艦シ約三十秒以内ニ行
動中ノ艦舎艇ニ歸還セシムル艦ヲ養成シ得ルモノト
認ム

五戰時港灣哨戒艇又ハ航門艇等連續出動スル艦
艇ニ艦舎ヲ搭載セバ容易ニ此艦通信艇ヲ養成シ
得ルモノト認ム

第三節 艦上艦ノ成績良好ナリシ理由
不從事員ノ無經驗ト技術未熟

艦上艦ニ對スル無經驗者ガ未熟ノ技術ヲ以テ而モ只推
理想傳ノミヲ以テ暗中摸索的ニ實施セシメ因

以海上研究訓練ノ實施困難

鳩訓練ノ爲ニ特ニ鳩舎艦又ハ放鳩艦ヲ行動セシムルハ我
海軍ノ現状ニ於テハ殆ド不可能ノ事ナリ故ニ只利用シ
得ベキ機會ヲ捕ヘテ實驗セシミニシテ所謂「行キ當リ
バッテリー」的ナリシヲ免レテ組織的ニ研究シ或ハ階梯的ニ
漸次訓練ノ度ヲ進ムルカ如キニ實行不可能ナリシ因ニ

第四節 艦上鳩トシテ採用スベキ鳩

一、艦上鳩トシテ採用スベキ鳩ハ優秀ナル幼鳩タルヲ要ス
其ノ幼鳩ハ艦上陸上何レノ鳩舎ニ孵化セルモノニテモ可ナリ
移殖スベキ年齢ハ生後五ヶ月以内ヲ可トシ生後三ヶ月乃
至五ヶ月以内、又移殖後充分ノ訓練ヲ行ヒ名後使用
セントスル場合ハ生後一ヶ月乃至三ヶ月以内ノモノヲ適當トス
只成鳩ハ幼鳩時代ニ艦上ニ於テ飼育訓練セルモノハ通信

海軍

昭和八年七月 大倉納

艦トテ充分使用シ得ルモノク固定艦舎ニ於テ飼育セラレタルモノ即チ陸上固定艦舎性各条導シタルモノハ海上移動性ノ養成ニ多大ノ努力ヲ日數ヲ要シ成績モ概シテ思ハシカラス

第五節 艦上艦舎ノ訓練法

一、艦上艦ノ訓練成績ハ艦船ノ移動頻繁ニ程良好ナリ故ニ幼艦ノ初期訓練ハ特ニ移動多キ艦船ニ於テ行フヲ良トス

二、最初ヨリ艦舎艦ニ於テ訓練ヲ行フヲ理想トスルモ該艦ノ移動數キ時ハ先ヅ他ノ移動多キ艦船ニ於テ初期訓練ヲシテ海上移動性ヲ養成シタル後當該艦ニ艦舎ヲ移動シテ實用ニ使スルヲ便トスルナリ

三、長期直リ同一地区ニ碇泊スル艦船ハ艦上艦ノ移動訓

海軍

昭和八年七月 大倉納

練ニ適セザルヲ以テ三月以上同一軍港等ニ碇泊スベキ場
合、艦舎ヲ他ノ行動頻繁ナル艦船ニ移轉シ海上移動
性ヲ低下セシメザルヲ可トス

ニ全ノ通信ノ必要ナキ港灣ニ碇泊（陸岸繋留入渠中
等殊ニ然リ）中ハ外界ヲ觀察セシメカニ様艦舎ニ自便
シラ施スヲ可トス

ホ、艦舎搭載後約六ヶ月、専ラ碇泊中ノ使用ニ對スル訓
練ノミツ行ヒ、艦内外別致碇泊中ノ出舎、艦外飛翔
ハ距離放艦ノ順序ニ准ヘキモノトス

ハ、航海中ノ使用ニ對スル訓練ハ碇泊中ノ訓練完了後開
始スルヲ安全トスルモ移動頻繁ナル艦船ニテハ碇泊中
ハ距離ヨリノ使用ニ適スルニ至ラバ徐々に航海中ノ訓練ヲ
開始スベキモノニシテ低速航行中ノ出舎（出港直後ハ危

險) 舍外飛翔次デ原速航行中、舍外飛翔ニ移リ然ル後
十軒以内、放鳩高速航行中(二十節以上ニテ困難)ノ出
金、舍外飛翔十軒以上、放鳩順序ニ進行スベキモトス

第六節 航海中通信ヲナシ得ル準備トシテ 必要ナル三事項

一、航海ニ對スル恐怖心ノ除去

幼時ヨリ艦上ニ於テ飼育訓練ヲ行フコトニ依リ實用上差
支ナキ程度ニ恐怖心ヲ除去シ得ルモノノ先天的性質ヲ一
舉ニ除去セトシテ急ニ激ナル訓練ヲ行フコトニ反對ノ結果ヲ
招致スベシ、實際ニ微スル艦上ニ飼育セラルコト一年以上、
及ビモ放鳩ノ際放鳩艦ニ追從シ又他艦、陸上、空航地
等ニ吸引セラル、フトラテ航海中ノ通信能力ヲ低下セシム
之皆海ニ對スル恐怖心ノ影響者ト見ルヲ得ベシ故ニ之カ

海軍

昭和八年七月 大倉

除き、関し、徐々ニ氣力ヲ努ムル要ス

ハ航海中、艦舎艦ノ状況変化ニ對スル恐怖心ノ除き

艦ノ移動、推進器ノ渦巻、濃キ煤煙、艦上諸作業

等、破泊中ト状況ヲ異ニスル為、恐怖ノ念ヲ起スモ之ガ除き

ハ左程困難ナルモノアラズ之等ハ常ニ觀望セシムレバ能ク

別致セラルモノナリ

ハ航海中、艦艇訓練ノ完成

艦が、艦舎艦ハ絶ヘズ移動スルモノナリトノ觀念ヲ獲得シ

航行中、艦舎艦ノ周圍ヲ旋迴飛翔シ、追從シ又此

ニ準著スルニ至ルニハ相當ノ日數ヲ要スルモノナリ

若宮、高崎、金剛等ニ於ケル實驗ノ結果ヲ見ルニ

收容後 二十日ニシテ不成功

、 五十日ニシテ半成功

海軍

昭和八年七月 大倉納

七十五日ニシテ殆ト成功

百十日ニシテ完全ニ成功

即チ十節ニテ航行中飛翔訓練ヲ行ヒ得ル迄ニ少ナクとも七十
五日ヲ要シ十節以上(二十節以上ハ不可能)ニ於テハ更ニ多
クノ日子ヲ必要トスルモノナリ

第七節 艦上艦ノ實用價值

艦上艦ノ用途ヲ大別スルバ次ノ如シ

一、航海中、艦船及ビ航空機ヲ航海中ノ艦舍艦ヘノ通信
口、碇泊中、艦船、航空機及陸上ヨリ碇泊中ノ艦舍艦ヘノ通信
第一項航海中ノ移動艦船ノ通信ニ大ナル期待ヲ持ツ能
ハズ、大正十三年度金剛ニ於ケル實驗ニヨレバ普通ノ天候
ニ於テ二十料以内ノ艦舍艦カ視界内ニアル場合通信ヲナ
シ得ル程度ニテ然モ相當ノ費消時間ヲ要シ分秒ヲ爭

海軍

昭和八年七月 大倉納

不如普通通信トシテ大ナル價值アルモノト認ムヲス

破海中通信極メテ有効重寶ニシテ特殊通信機關トシテ

其ノ價值大ナルモノト認ム

金剛ニ於ケル次ノ實驗例ハ雄辯ニ之ヲ物語ルモノナリ

例一 大正十三年十月二十日 於佐世保軍港 天候晴、風力一

通信所	受信所	距離	通信時間	備考
佐世保	佐世保軍港	五五新	手旗五分	中継艦ニ一回中継セリ
鎮守府	加瀬橋金剛	五五新	軍旗五分	二回放電ノ平均

例二 大正十三年 三回房上陸陸戦隊金剛間ノ通信

通信所	受信所	距離	通信時間	備考
三回房外	三回房在泊	一〇新	輕便無線一分	十一回ノ平均
演習地	(司令部)		軍旗七分	

乃々艦上艦ノ用途ハ次ノ箇所ニ於テ最其價值ヲ發揮シ得ルモ